



ガメラの 出番



川崎ゆきお

「怪しいのは工場ですよ」

「ほう」

「工場の敷地内。これが怪しい」

「何が」

「妙なものというより、昔はしっかりとしたものだったはずなんですがね。まあ、墓ですよ」

「工場内に墓が」

「昔からあった墓ですよ」

「ああ、古墳」

「古地図に残っているような塚は別ですがね。ある程度開けた平地にある田圃のあった場所や山沿い。大きな工場なら、ごっそりと買い取ったのでしょ。当然塚があることが分かっていますからね、さすがに壊せない。だから、敷地内に残している。昔の村の墓などは、子孫が入れるように塀に工夫がある。敷地内だけど、工場内ではない。塀代がもったいないが、仕方がない」

「ありますよ。うちの近所にも」

「そうでしょ。墓参り程度は出来るようにね」

「しかし、それじゃ怪しいものが工場内にあるとは言えませんよ」

「だから、古地図に残っているようなものとか、土地の人が知っているものは別です。ところがあまり大きくない町工場、しかしそれなりに敷地が広い場合、さらに工事のとき初めて出てきたような遺構や遺跡、墓、塚、まあ、古墳規模なら、土地の人が知ってるはずなので、無理でしょうがね。しかし、古墳などが滅多にない土地などに、こっそり埋葬したかもしれません。そして、記録が一切ない。土地の人がそもそもいないような場所。これは古墳じゃ滅多にないかもしれませんよね。大体同じような場所に集まっている。昔からあり、大事にされている古墳でも、誰が眠っているのか、土地の人も知らないことも多いです。繋がっていないからです」

「それで、怪しい塚とは」

「海岸沿いの工場群は別ですよ。あれは埋め立て地だ。大昔は陸地だったら別ですがね。それでも埋めるでしょ。だから、海底にあっても分からない」

「怪しい塚の話は？」

「はいはい。まあ、工場内を外から見ても分かりますが、こんもりとした木が植わっている。これは分かりやすい。元々そこにあった何かでしょ。または、お稲荷さんを置く会社もあるでしょ

うが、村時代の神社跡が残っているだけでも怪しいです」

「怪しくないです」

「その場合、敷地内なので、もう塀の中。外の人はお参りに来れない。また、その規模じゃないとか。その氏神さんは、別のところへ引っ越したかです。だから、見た目は旧村時代の神社跡のように見えますが、もう無人。いや無神というべきでしょ。何も祭っていない社。これが怪しいのです」

「もの凄く、遠いところから、入っていくようですが」

「当然、本当に怪しいのも入っている。先ほど言ったように、旧村民も知らなかったものが、敷地内で建物を建てる時、出て来たとかもある」

「それは細いです」

「可能性の問題だ」

「それは何ですか」

「密かに埋葬したものや、人知れず封印したようなものだ」

「来ましたねえ」

「町内にある見慣れた工場内、そこは意外と知られていない」

「でも何を封印していたのでしょうか」

「まあ、それが解けて、大きな災いをもたらすってこともないとは思うけどね。怪鳥でも飛び出すのなら別ですがね」

「それなら、日本中で、そんな異変が起こり倒していますよ」

「そうだね、何か出て来ても、ややこしいので、届け出しなかったりね。気付かなかったことにして、壊していますよ」

「気が付かなかったと、塚なかったの洒落ですね」

「そうだね。塚なかったんだ」

「でも、何の塚だか分からないのに、塚の入り口のような地名が残っていたりしますよ」

「塚口とか、塚出とか、塚本とかね。それが何処の塚を差しているのか、見当が付かない場合、つまり近くにそんな塚や古墳がない場合、これは工場が怪しい」

「またですか」

「工場の敷地内に、あるんだ。いや、あったんだ」

「はいはい」

「そういう視点で、中を隠すように建てられた工場の塀の向こうをご覧ください。木が茂っているところが怪しいが、あれは、もう分かっているもので、建物の下が怪しい。それでね……」

「まだ、続きますか」

「その巨大な敷地の工場が閉鎖され、そして取り壊されることもある」

「近所にもありますよ。薬品メーカーや、菓子メーカーの大工場が」

「それで更地になったとき、結構下まで何かが染みている。地面深くまでね。まあ、汚れた土地になっている。そんなものすぐに上から盛り土してしまうだろうけど、このとき、出て来ますよ」

「何が」

「だから、封印されていたものですよ」

「その封印は工場を建てたとき、潰したのでしょ」

「潰したが、工場が蓋になって、それが封印の役割をしていた。だから、取り壊された遺跡の地面は裸だ。この時期が一番危ない」

「はいはい」

「そのあと、また工事で、今度は巨大住宅群が建つ。高層マンション群だね。昔の村人の何十倍以上も住んでそうなの」

「はいはい」

「高層マンション群や、何々タウンとなって、大手が作るこの種の物件、以前何があった場所なのかを知るのも大事だ」

「真下に遺構がまだ眠っていらそうですねえ」

「そうだろ。それで、呪われたニュータウンになる」

「もう、分かりましたから」

「そうか、何が因果か分からないようなものが、世の中には渦巻いている」

「はいはい、お話しとしては楽しませて貰いました」

「怪鳥がそのうち飛び出す」

「じゃ、ガメラが退治してくれますよ」

「そ、そうだね」

了